

# 実習事前指導のあり方について

## 3. 責任実習の現状分析より

杉山 喜美恵 (教育学)

### はじめに

昨今の「保育」を取り巻く環境の変化はめまぐるしい。児童福祉法の改正、保育士の国家資格化、保育士養成カリキュラムの改訂、そして教育基本法の改訂にむけての動き、幼保一元化などキーワードだけでも多くあげることができる。また、平成17年度からは、総合施設(仮称)のモデル校が実施の運びとなり、それもまた、これからの「保育」のあり方に一石を投じるものになるであろう。

そのような状況の中、保育士養成という視点で見ると、やはり保育士資格の国家資格化ということが大きなできごととしてあげられるであろう。それに伴い、保育士養成カリキュラムも見直しを図られることとなった。改訂のポイントは、さまざまな項目があげられているが、実習に関していえば、「実践力や応用力を持った保育士を養成するため、施設現場における実習の強化を図ることが必要である」<sup>(1)</sup>との意見を受け、「保育実習Ⅱ」「保育実習Ⅲ」という科目が新たに設定されることとなった。

「保育実習Ⅱ」の目標は、「保育所の保育を実際に実践し、保育士として必要な資質・能力・技術を習得させる」<sup>(2)</sup>こと、「家庭と地域の生活実態にふれて、子ども家庭福祉ニーズに対する理解力、判断力を養うとともに、子育てを支援するために必要とされる能力を養う」<sup>(3)</sup>ことの2項目があげられている。

内容として8項目があげられているが、<sup>(4)</sup>その中には、「指導計画を立案し、実際に実践させる」という項目があり、「保育実習」科目の「保育所における実習」にあげられている「保育計画・指導計画を理解させる」という項目を一段階進めたものとなっている。すなわち、

「保育実習Ⅱ」では、新たに指導計画を自分で立て、実践するということが課せられたことになる。

これらを受け、当校での「保育実習Ⅱ」のねらいとして「保育を実践して、保育士としての資質・能力・技術習得する。また、家庭と地域の生活実態に触れて、子育てを支援するために必要とされる能力を養う」ことをあげている。また、実習内容として、「保育実習Ⅱ」の主目標には「保育参加」を柱にしている。

「保育実習Ⅰ」では、「2週間の実習中、観察参加実習を主とする」のに対し、「保育実習Ⅱ」では、「指導計画を立案し、実際に実践させる」という事項をうけ、「実習期間2週間以内に最低限、半日実習を1回おこなうこと。なお、参加・部分実習はできる限り機会を多くして欲しい」と実習施設に要請している。

したがって、学生にとっては、指導案を書くという機会が今以上に増えることになる。今までは、当校の場合、指導案を書くことは2年次の5月終わりから行われる幼稚園後期実習においてのみであったのだが、今回からは保育所実習においても指導案を書くことが求められる。

実習において学生は、毎日の実習記録簿記入に始まって、「書く」という作業に追われることになるわけだが、中でも「指導案を書く」ということは、実習に対する不安事項としてあげられる代表的な項目である。

では、そのような学生に対し、実習指導がどのようになされているかということだが、「実習概説」という科目が2年次前期に位置づけられている。「実習概説」は、幼稚園教諭免許取得のための必修科目であるが、2年次前期という時期的なことから考えると、その科目

の中で指導案の書き方の指導を行っていかねばならない。限られた時間数の中でいかに効率的に指導を行っていくかが問題となってくる。

効率的な指導を行っていくためには、幼稚園、保育所での責任実習の現状を分析することによって、両者の相違点を明らかにし、指導内容を構築していく必要があると考えた。そこで、今回はその手始めとして、幼稚園後期実習における責任実習の分析をおこなった。

#### 幼稚園後期実習の概要

「教育実習」は、幼稚園教諭免許状（二種）を取得するための必修科目であり、実習事前事後指導 1 単位を含めて 5 単位取得することが求められている。この 4 単位を取得するため、おおむね 4 週間の実習が必要となる。

実習の形態は、各養成校により異なり、4 週間続けて集中的に行う場合、分散型として 2 週間ずつ行う場合、あるいは当校のように 1 週間と 3 週間とに分けて行う場合等がある。それぞれの名称は、各養成校で異なるが、当校では、先に行う 1 週間を「幼稚園前期実習」と呼び、1 年次の 2 月に、後に行う 3 週間の実習を「幼稚園後期実習」と呼び、2 年次の 5 月下旬から 6 月にかけて行っている。

以下、前者を「前期実習」、後者を「後期実習」と呼ぶことにする。

後期実習のねらいとしては、「学習した理論や技術を応用し、幼児保育に対する理解をさらに深める」こととし、主目標を「保育参加」におき、以下の 4 点を具体的内容としている。

- ① 幼児保育及び幼稚園の行事に参加する
- ② 単元（部分）保育を体験する
- ③ 幼稚園教諭としての勤務のあり方や保育事務を体験する
- ④ 実習についての総合的成績評価を受ける

また、実習期間中に最低限研究保育（責任実習と同義）を 1 回、参加・部分実習については「できる限り機会を多く」と要請している。

#### 調査概要

##### 1. 調査対象者

東海女子短期大学児童教育学科幼児教育専攻 2002 年度入学生 103 名

##### 2. 調査時期

2003 年 7 月

##### 3. 調査方法

2003 年度前期に開講された「実習概説」の課題レポートとして課した。

##### 4. 調査内容

内容は、大きく二つに分かれており、一つ目は責任実習の回数と時間、部分か全日かという形態、そして自由保育か設定保育かの種別を問うたものである。

二つ目は、学生が行った責任実習の中から一つを選択させ、それについて記述させた。

まず、責任実習について以下の 15 項目に対し、A、B、C の 3 段階で自己評価を求めた。

- ① 日常の保育に溶け込んだ計画であったか
- ② 保健・安全面に配慮した計画であったか
- ③ 子どもの個人差を配慮した計画であったか
- ④ 保育環境の整備は適切であったか
- ⑤ 次回への発展性のある保育であったか
- ⑥ 偶発的・突発的場面の処理は適切であったか
- ⑦ ねらいは達成できたか
- ⑧ 子どもの興味や関心、表現方法の差異など体験的に理解できたか
- ⑨ 子どもの言葉に気づける保育であったか
- ⑩ 自分でなく、子どものペースで進められた保育であったか
- ⑪ 子どもの個人差に配慮した保育であったか
- ⑫ 活動への導入はスムーズであったか
- ⑬ 最後まで責任をもって保育を進めることができたか
- ⑭ 教材研究は十分であったか
- ⑮ 指導案は余裕を持って提出できたか

次に以下の点について、記述を求めた。

- ① 活動をスムーズに進めるための工夫について
- ② 教材研究について
- ③ 実際の保育を進めるに当たっての反省
- ④ 反省会で指導を受けたことについて

#### 結果

##### 1. 責任実習の回数、時間、形態、種別、内容

それぞれの調査内容についての結果を報告する。

まず、はじめに責任実習の回数について、部分、全日の形態別に見てみる(図1、図2)。部分実習については、103名中有効回答数が97名であった。部分実習を1回おこなったものが63.9%、次いで2回が29.9%、そして3回以上が6.2%であった。すべての学生が部分実習を1回は経験しており、実習園側は当校の要請を受け入れてくれていることがわかる。また、このことから、指導案を書くという行為を全員が経験しているといえる。

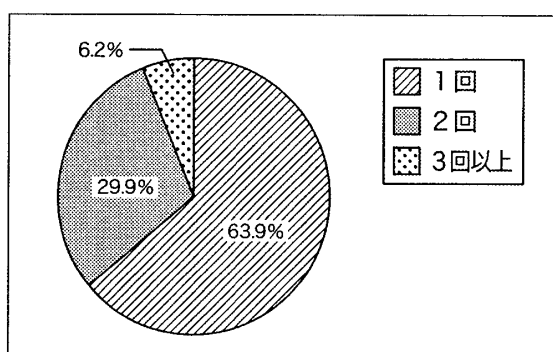


図1 責任実習の回数(部分)

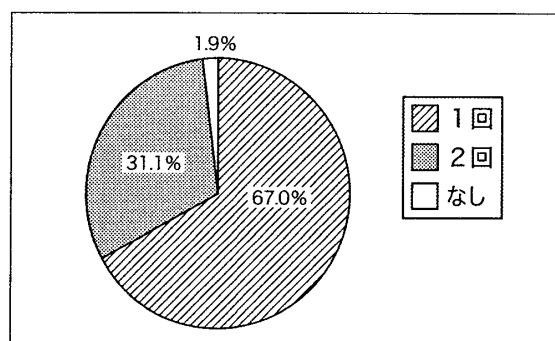


図2 責任実習の回数(全日)

全日実習については、有効回答数103名中、全日実習を行わなかったものが69人で67%と最も多く、1回おこなったものが32人で31.1%であった。約7割の学生が全日実習をおこなっていない。

日数別件数については(図3)、2週目、3週目が多いことがわかる。6、7、13、14、20、21は土、日にあたり、件数が0となっている。

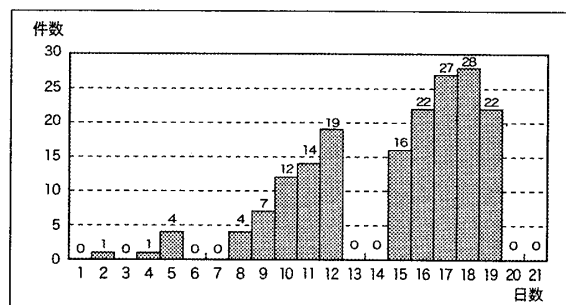


図3 日数別責任実習件数

責任実習を行った学年としては、年長が一番多く、次いで、年中、年少の順となっている(表1)。保育を行った時間は、平均で年長が57分、年中54分、年少53分の順で短くなっているが、あまり大きな差はみられなかった(表2)。

表1 責任実習を行った学年

学年	件数	割合 (%)
年長	45	43.7
年中	35	34.0
年少	22	21.4
全学年	1	0.9
計	103	100.0

表2 保育を行った時間

学年	平均時間
年長	57分
年中	54分
年少	53分
全学年	55分

責任実習の種別についてだが、保育のタイプを「活動提案型」と「遊びの延長・発展型」という2つのタイプに分けてみる<sup>6)</sup>と、111件中100件が活動提案型、残りの11件が遊びの延長・発展型という結果になった(表3)。遊びの延長・発展型はすべて公立の幼稚園における責任実習であった。

表3 責任実習のタイプ別件数

種類	件数 (%)
活動提案型	100 (90.1%)
遊びの延長・発展型	11 (9.9%)

次に、100件の活動提案型のうち、保育の活動内容を絵を描く、何かを作る、ゲームをするという活動が単一の型と、それらを組み合わせた複合型に分けた結果、約6割が単一型、残りの4割が複合型であることがわかった(図4)。

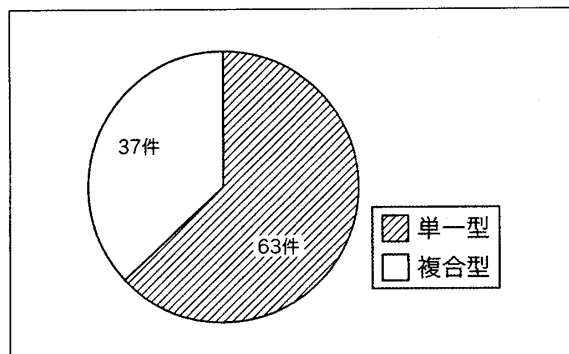


図4 活動提案型の内訳

単一型の活動内容をまとめたものが表4である。それによると、同一の活動としてはフルーツバスケットが9件で一番多く、次いでスクラッチの8件となっていた。フルーツバスケットは対象学年が4、5歳児であった。

その他絵画としては、「交流会の思い出」と「先生の顔」であった。フルーツバスケット以外のゲームとしては、「じゃんけん列車」が2件、いす取りゲーム、しっぽとり、爆弾ゲーム、旗揚げゲーム、集めっこしよう「○、△、□」、ダンボールキャタピラが各1件ずつで対象年齢は集めっこしよう「○、△、□」が3歳児であとは4歳児対象の保育であった。ゲームに関しては、ルールを理解する力、集団で遊ぶということに楽しさを感じる、自分を抑えるなどの力が必要とされるため、4、5歳児が比較的对象とされる場合が多い。

制作に関しては「かたつむり」「かえる」「父の日のプレゼント」など季節に関するものが8件あった。

表4 単一活動型の内容

活 動 名	件数	平均活動時間
フルーツバスケット	9	41分
5歳児	5	
4歳児	4	
スクラッチ	8	平均時間
5歳児	3	59分
4歳児	2	
3歳児	2	
不明	1	
パチック	4	55分
5歳児	1	
4歳児	2	
3歳児	1	
かたつむり	3	45分
5歳児	0	
4歳児	0	
3歳児	2	
全学年	1	
じゃんけん列車	2	40分
5歳児	0	
4歳児	2	
3歳児	0	
新聞遊び	2	60分
4歳児	1	
3歳児	1	
小麦粉粘土	2	45分
5歳児	1	
3歳児	1	
吹き絵遊び	2	75分
5歳児	1	
4歳児	1	
かえる	2	52分
5歳児	1	
4歳児	0	
3歳児	1	
染め遊び	1	60分
3歳児	1	
その他制作	12	50分
5歳児	4	
4歳児	6	
3歳児	2	
その他ゲーム	5	49分
5歳児	0	
4歳児	4	
3歳児	1	
不明	0	
その他の絵画	2	60分
5歳児	1	
3歳児	1	

表4 単一活動型の内容

複合型の主な活動内容としては（表5）、すべての責任実習で、制作したもので遊ぶという「作る」「遊ぶ」という2つの活動が含まれていた。題材としては「びよんびよんかえる」が一番多く12件であった。その他おもちゃが11件で、内容としては、たこ、コマ、紙ヒコーキ、けん玉、ヨーヨーなどがあつた。

また、「魚つり」も8件と多く、子どもが魚を作り、それを使って魚釣りをするという内容であった。魚を作る時間の設定がそれぞれの学生で異なり、魚の形を作っておき、色をぬるだけのもの、魚の形をあらかじめ紙に描いておき、子どもが形を切って色をぬるといった段階のもの、自由に魚を描かせるものなど対象年齢にあわせたレベルでの制作となっていた。

小麦粉粘土については、粘土を作るところから行ったものが3件だが、あらかじめ作っておいた粘土を使用して遊ぶという活動も2件あつた。それらは2件とも3歳児対象であつた。

表5 複合型の活動内容

活動名	件数	平均活動時間
びよんびよんかえる	12	54分
5歳児	9	53分
4歳児	1	60分
3歳児	1	不明
不明	1	不明
その他のおもちゃ	11	56分
5歳児	5	66分
4歳児	3	46分
3歳児	1	50分
不明	2	52分
魚つり	8	53分
5歳児	5	53分
4歳児	3	53分
小麦粉粘土	3	71分
5歳児	1	90分
4歳児	1	60分
3歳児	1	65分

2. 責任実習に対する自己評価

前述の15項目についての自己評価結果をまとめたものが図5である。自己評価というものは評価をする人の主観に負うところが多く、客観性、公平さに問題があるというのは自己評価結果をもとにして何らかの知見を導き出そうとするときによくいわれることである。そこで、今回はどの項目が学生にとって一番難しいと感じたかという観点でこの結果をみたい。

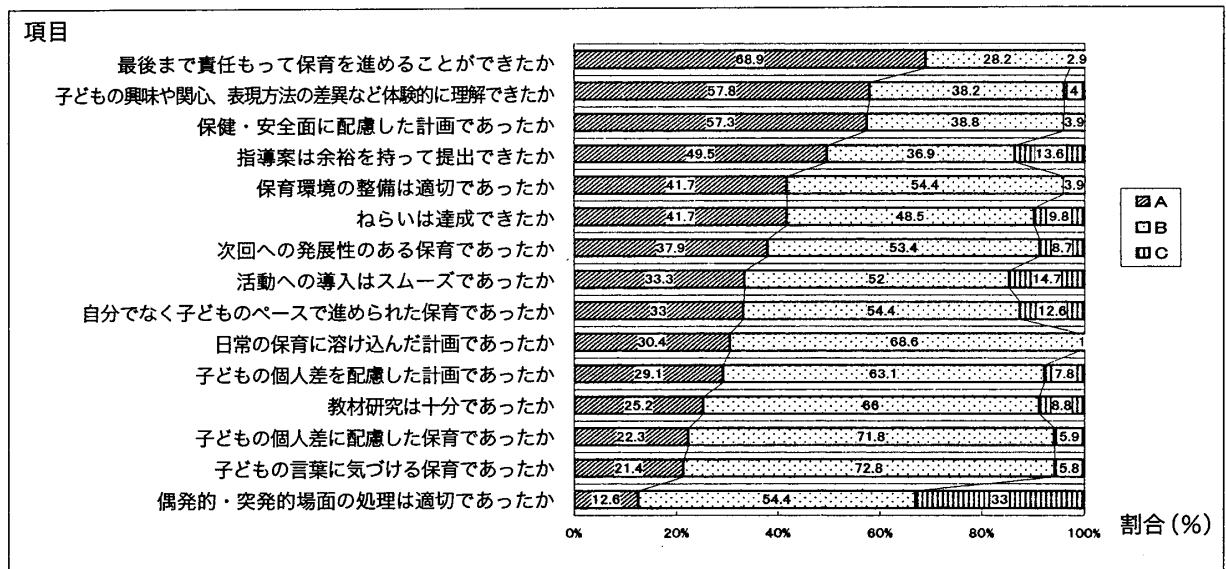


図5 責任実習に対する自己評価

これによると、一番A評価の多かった項目は、「最後まで責任をもって保育を進めることができたか」という問いに対するものであった。とりあえず途中で放棄することなく、最後まで保育をやりとげることができた学生が多かったということがわかる。反対に、一番A評価の少なかった項目は「偶発的・突発的場面の処理は適切であったか」という項目であり、C評価をつけた学生も約3割いた。自分の予測と異なることが起きたときの対処法が学生にとっては難しい点であるといえる。原因としては、子どもの活動の予測がさまざまな場面を想定して十分におこなわれていなかった、あるいは教材研究が十分でなかった、責任実習を行う前までの子どもの観察が不十分であったことなどが考えられる。観察実習段階で子どもの観察が十分でなかったことが子どもの個人差に関する項目（「子どもの個人差を配慮した計画であったか」「子どもの個人差に配慮した保育であったか」）に対する評価の低さにもあらわれている。

### 3. 指導された点

次に指導された点についてまとめた。指導された点で最も多くの記述が見られたのは、「ことばがけ」に関するもので32件あった（表6）。主なものとしては、大きな声で、明瞭に、抑揚をつけるという表現力に関するものが7件、子どもの興味や関心を引き出すことばがけをするというものが同様、7件であった。

次に保育の進め方についてだが、導入に関するものが12件で内容としては、導入にかける時間が長い、子どもの興味を喚起するようもっと工夫するということがあげられていた。

説明に関しては18件で子どもの注目を集めてから説明をする、一度に説明をする量を考える、説明をいれる時間的なタイミングを読み取る、サンプルを子どもが見やすいよう大きくする、途中経過のサンプルを作る、黒板、チョークの色などの使用を工夫するなどがあった。

全体の把握というのは、積極的でない子どもを見落とさない、早くできてしまった子を

あきさせない、遅い子どもをあせらせないなどクラス全体の子どもの状況を常に把握して保育を進めるようにというものであった。

と同時に、一人ひとりにも目をむけてその子にあった援助を行うということも9件あった。

突発的なできごとに対する対処と指導案にこだわらないで常に子ども主体で行うということは学生が保育をするにあたって非常に難しく、うまくいかなかった点として多くあげられていたが、指導された件数としては、少なかった。

環境構成にかかわる点としては、15件の記述があった。子どもの動線を考えた備品や教具の配置。子どもの数や活動にあった備品の数。配布の仕方。のりがついたり、クレヨンが床についたりした場合への対処などがあげられていた。

その他としては、特に複合型の保育に多かったが、遊びと制作の時間配分を考える、導入、展開、まとめの時間配分を考えるというものが8件あった。また、自分も一緒に楽しむようにというものが7件、子どもの活動をもっとさまざまな方向から予測すること、教材研究が不十分であるという指摘も3件見られた。

表6 指導された点

ことばがけ	大きな声で、はっきりと、抑揚をつける	7
	子どもの興味や関心を引き出す	7
	すべきことを正確に理解させる	4
	子どもの状態を的確に把握する	4
保育の進め方	難しいことばを使わない	4
	導入に関する事柄	12
	説明に関する事柄	18
	全体の把握	10
	個々の子どもへの配慮	9
	突発的なできごとへの対応	4
環境構成	指導案にこだわらない	4
	備品の活用の仕方	4
	使用する物の配布方法	3
	物品の置き場所の配慮	2
	準備する備品の数	2
その他	安全面への配慮	2
	時間配分	8
	自分も一緒に楽しむ	7
	子どもの活動の予測があまい	5
その他	教材研究が不十分	3
	反省をしっかりとする	3

#### 4. 責任実習を行っての反省点

実際に責任実習を行ってみてどうだったかという問いに対する記述回答をまとめた(表7)。一番多く見られたのは、「突発的な予想外の子どもの行動に対処できなかった」ということで21件あった。「一応、自分なりに言動の予測をたててみたが、実際には自分の予想をはるかに越えるものであった」というもの、「予想を越えた言動をとりあげることができればもっと発展性のある保育を行えたのに」という意見もあった。

表7 反省点

突発的、予想外の子どもの行動への対処	21
子どもに理解できるような説明の仕方ができなかった	15
全体をまとめることが難しかった	13
個人差に対応することができなかった	13
安全や子どもの動きに配慮した環境構成がなかった	8
子どもの行動の予測をしっかりとすべきだった	7
教材研究が不十分であった	6
緊張してすべきことを忘れてしまった	6
余裕がなかった	5
計画どおりに進めようとした	3
時間配分がうまくいかなかった	2
子どもの観察をしっかりと行うべきだった	2

「子どもにわかるような説明の仕方ができなかった」というものが15件あった。そのために、個人差の幅が広がってしまったり、一人の子どもにかかりつきりになったり、何度も説明をしなくてはならなくなったり、保育を進める上での困難さを増やしてしまった結果になったと記されていた。

「全体をまとめることの難しさ」についても13件の記述があったが、これはまとめるとともに子ども全体の様子を把握するということが含まれている。後ろで遊んでしまっている子どもに気づかなかったり、子どもの活動に対するやる気がでたときに中断させてしまっ

たり、全体を見ながら次の段階へと活動を進めていくことが難しかったという記述が見られた。

「個人差に対応することができなかった」というのは、主に早くできてしまった子への対処の仕方を考えるべきだったというものが多かったが、学生が予測したよりも個人差が大きかったという記述も見られた。

反省点をまとめてみると、あげられた項目はそれぞれが関連性をもっていることがわかる。たとえば、「子どもの行動の予測をしっかりとする」「子どもの発達にあった計画をたてるべきだった」「個人差に対応することができなかった」「子どもにわかるような説明をすべきだった」という項目は、「子どもの観察をしっかりと行うべきだった」と関連している。事前の観察の段階で一人一人の子どもの言動をしっかりと把握していればもっと個人差に対応することができたであろうし、子どもの行動の予測もより多くの場面の予測ができたであろう。また、クラス全体を見ていれば、発達にあった計画をすることも可能であったろう。すなわち、観察の段階での子ども理解が不十分であったと考えられる。

しかし、どれだけ精密な予測をたてても実際の保育では予想外の、突発的な子どもの言動は起こりうる。その場合に、パニックになってしまったり、指導案どおりに進めようとするのではなく、臨機応変に対処できればよいのだが、それはある程度の経験年数をつまなければ難しいであろう。

#### ま と め

今回の調査より以下のことがわかった。

- ・ 責任実習の回数については、部分実習を1～2回程度、実習の2、3週目に行っている学生が多い。
- ・ 全日実習は約7割の学生が行っていない。
- ・ 保育を行った学年は年長が一番多く、次いで年中、年少の順である。
- ・ 保育を行った時間は平均1時間弱であり、

学年で大きな差は見られなかった。

- ・形態としては活動提案型（いわゆる設定保育）の保育が9割をしめていた。
- ・活動の内容としては単一活動が6割、複合型が4割であった。
- ・学生の自己評価から、学生は突発的・偶発的場面への対応や子どもの個人差への配慮に対して難しいと感じている。
- ・指導された点として一番多かったのは、「ことばがけ」に関してであり、次いで「保育の進め方」についてであった。
- ・学生自身の反省点としては、「突発的、予想外の子どもの言動への対処が難しかった」ということが多くあげられていた。また、責任実習前の観察が不十分であったことが原因だと思われる事柄が多い。

以上のことからみると、事前指導内容としては、まず、活動提案型の部分保育指導案を書くことができる能力をつけることが必要であるといえる。と同時に、観察実習のポイントや方法などの指導を強化させていかなければならない。また、さまざまな場面を想定して、子どもの言動を予測する力をつけること、同時に教材研究をすることも重要である。そのための方法として、今回活動内容として多くあげられたものに関しては、模擬保育という形でシミュレーションすることも有効であると考えられる。

今後の課題としては、保育実習における責任実習の分析も同様に言い、教育実習との比較を行うことがあげられる。教育実習は3週間、保育実習は2週間、その期間の違いが責任実習にどのように影響してくるのか、また、保育実習においては養護の面がどのように保育計画に反映されているのかを分析することによって、両者の責任実習の相違点を明らかにしたいと考えている。

また、自己評価項目についても内容に偏りがみられたので、見直しをする必要があると感じた。

今回は、個々の指導案については分析をすることができなかったので、今後、それについても並行して行っていきたい。

## おわりに

今年も10月20日（水）から22日（金）の3日間、全国保育士養成セミナーが行われたが、その中で保育実習のミニマムスタンダードを作成していこうという提案がなされた。また、分科会では実習施設と養成校の連携についてのテーマも提示されていた。研究大会でも実習について多くの発表がされた。こういった状況から見ても実習についてはまだまだ問題が山積の状態であるといえる。少しずつでも調査分析を重ねることによって問題解決に貢献していきたいと考えている。

本稿は全国保育士養成協議会第43回研究大会に発表されたものを加筆修正したものである。

## 注

- (1) 保育士養成課程等検討委員会  
「今後の保育士養成課程等の見直しについて(報告)」2001年
- (2)(3)(4) 前掲書
- (5) 阿部明子他『幼稚園・保育所実習の指導計画案はこうしてたてよう』萌文書林、1984年を参照した。

— 児童教育学科 幼児教育 —